

令和2年(ワ)第6225号、第31962号、令和3年(ワ)第30042号

令和4年(ワ)第32493号 六ヶ所再処理工場運転差止請求事件

原告 中嶋哲演 外256名

被告 日本原燃株式会社

## 準備書面30

2026年2月19日

東京地方裁判所民事第37部合議C係 御中

原告ら訴訟代理人弁護士 河合弘之

ほか

原告飯田瑞穂の具体的な権利侵害の内容及び本訴訟を提起した経緯は別紙のとおりである。

## はじめに

日本基督教団の牧師、飯田瑞穂と申します。私は、キリスト教団体を通してチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故で汚染地域となったウクライナやベラルーシの村々を視察し子どもの支援などを行ってきました。

2022年2月24日、ロシア軍がウクライナに侵攻直後、チェルノブイリ原子力発電所を占拠し、警備隊と戦闘を繰り広げ、原発の電源を遮断しようとしたことに震撼させられました。咄嗟に私の脳裏によぎったのは、1986年のチェルノブイリ原発事故のことでした。ウクライナとベラルーシは、旧ソ連崩壊後の混乱と経済低迷を経たこの40年来、とりわけ子どもの命と健康を守るために医療機関や学校、行政、外国の支援団体などで働く人たちが必死の努力を重ねてきましたが、長年苦悩しながら積み上げてきた取り組みが、戦争と無知のために一瞬で壊わされしまう危険性を目の当たりにしたように感じました。ロシアも原発事故の当時国ですが、原発事故の恐ろしさを忘れたのでしょうか。常軌を逸する戦争。原発は自国に向けられた核兵器となりえることが誰の目にも明らかになりました。

## 私とチェルノブイリ事故との出会い

私がチェルノブイリに関わるようになったのは、事故から5年後の1991年、町立病院の医師が我が家を訪ねてきたことがきっかけでした。汚染地域では、子ども達に様々な健康被害が起き、100万人に1人ないし2人といわれた小児甲状腺ガンが急増しはじめた頃でした。医師が持参した新聞記事によると「ドイツでは汚染地域から子どもを一ヶ月預かると、子どもの免疫能力が上がった。北海道の市民も、子どもたちを夏休みに招かないか」とありました。私たちが当たり前としている空気や水、食事を提供するだけで、子ども達の健康が回復するという事に驚き、数家族で子どもたちの保養を始めました。実際に来た子どもたちは心身のストレスから解放されると伸び伸びと遊び、元気を取り戻して帰国していきました。

現在もベラルーシとウクライナでは国家事業として、年間被ばく線量0.5ミリシ

一ベルト以上の汚染地域に住む子どもたちに年2回の保養を行っています。子どもたちは学校単位で保養に行き、クラブ活動をし、医療も受けます。甲状腺手術を受けた親とその子どものための保養。血液・リンパ系の病気の子どものための保養もあります。汚染から離れた環境で安全な食事を摂ることによって、体内に蓄積された放射性物質を20%排出できることが今では証明されています。甲状腺ガンや難病を患う子どもを持つ貧困家庭にとって薬を買う負担は大きいため、親がアルコールに依存したり、重篤な病気や障ガイを負う子どもがいる家庭では男親が女性に暴力を振るい家から去っていったりすることも珍しくありません。青少年の自死も目立ちます。困難を抱える汚染地域の子どもの家族にとって、保養は心身を支えてくれる希望となっているのです。

## 希望 21

ベラルーシ国内に、海外が支援する「希望 21」という保養所があります。そこで、医師とカウンセラーからこのような挨拶をされたことがありました。「みなさんのおかげで、子どもたちが生きのびることができました。もしも、私たちの子どもたちが一世代生きのびられなかったら、この国は消えていたでしょう」と。事故当初、旧ソ連では中絶可能期間の延長措置を採ったことや女性の正常な分娩が難しくなったこともあり、ベラルーシでは原発事故後10年以上も出生率より死亡率が上回った状況が続いていました。ようやく改善の兆しが見えたのは、国や民間が手探りで放射能防護対策を講じる中、子どもたちの健康を願い、その運命が少しでもよくなるようにと、国内外で真剣に努力する市民たちの働きが大きかったのです。たとえば、行政の手が行き届かない事故当初から、チェチェルスク州に住む中学教師ウラジミール先生は、森の中の農家を一軒一軒訪ねて親を説得し、子どもを海外に出す煩雑な書類を作成して貧しい農村の子どもたちを海外に送り出しました。教師を退官した後は、育児放棄した親のための回復プログラムに関わり若い家族を支えています。福島事故後に現地をお訪ねすると、先生は私に我が家で保養していたターニャと赤ちゃんに会わせてくれました。あの時、ターニャは9歳でした。過酷な汚

染環境でも無事に出産し子育てしていたのです。「大人に見守られている子どもはストレスに強い」と語るウラジミール先生の言葉が、福島事故後生きねばならない日本の私たちに示唆を与えてくれました。

### 戦時下のウクライナの子どもにとっての保養

現在、ウクライナの汚染地域に住む子どもたち、またチェルノブイリ世代の親たちは、健康被害を抱えながら戦争という二重の苦しみに見舞われています。しかし、この戦争のさなかでも子どもたちに出来る限り保養が提供されていることを知り大変驚かされました。ある日本の救援団体によると、ジトミール州ナロジチ地区はロシア軍から大きな被害を受けましたが、様々な病気を抱えた子どもたちは汚染が少なくロシアとの国境からも離れた山村の保養所に逃れたとのことでした。子どもの感想をひとつ紹介します。

スタニスラフ・L（12歳）「戦争の恐怖から離れ、心を休める機会をもらったことに感謝します。僕たちのことを忘れないでくれてありがとう。僕たちはいろいろなところに遠足に行き、川辺や山の中を歩いたりしました。まさかカルパチア山脈を自分の目で見ることができるなんて思ってもいませんでした。すべてに感謝します。そしてみなさんは僕に、どんなにお金を出しても買えない貴重な贈り物をくれました。それは新しい友だちです」（「チェルノブイリ子ども基金」のニュースレターより）。

新しい出会いと大人の見守りが、子どもたちに生きる希望を与えていことがわかります。チェルノブイリ問題は終わったと世界から原発事故が忘れられていく陰で、今後も保養を続けていこうとする人々の強い意志を感じました。

### 核廃棄物の問題

翻って、日本はどうでしょう。チェルノブイリから一切学ばず、保養も放射線防護教育も推進しません。年間被曝線量 20 ミリシーベルトを許容し、それを子どもにも押し付け、小児甲状腺ガンと原発事故との因果関係を認めず、ウクライナ問題

を契機に原発回帰に舵を切り、政権の高官からは「核保有」の発言まで飛び出しました。この国にとって福島のコ事故は何だったのでしょうか。

核燃料サイクルを中心に据える日本の原子力政策によって生み出された核廃棄物は全国に約 1.9 万トン存在していると国は公表していますが、地殻変動の激しい日本に十万年に亘って安全に地下に閉じ込められる処分適地はありません。

過疎地の原発で作られた電気は、首都圏に送られる一方、全国のコ原発から出る使用済み核燃料は、六ヶ所村の核燃料再処理工場に集められ、再処理され、最後は過疎地のどこかに埋設されるという計画だそうですが、その再処理工場が本稼働すれば、原発から出る 1 年分の放射能を 1 日で放出するため、万が一、地震などによる事故が起これば、より過酷な事故になり得ます。また、再処理する工程で原爆の原料となるプルトニウムが生産されるのです。危険なゴミは過疎地へ、見えない場所へ、被ばく労働者など弱い立場の者へと押し付けられ、まっさきに放射線被害の影響を被るのは子どもや妊婦、胎児です。地球の悠久な時間から見れば、わずか一時の電気を得るために巨額な資金を投じて利権を貪る原発。それに伴う核廃棄物を半永久的に地球に遺すことについて、未来の子どもたちは私たちにゆるしてくれるでしょうか。

## 命をつなぐ権利

「原発事故さへなければ」汚染地域で何度も聞いた言葉です。本来、地球では水や大気あらゆる物質が循環し、自然界にあるすべての命は支え合い繋がり合い、互いの調和の中で生かされてきました。人々は土から頂いたものを土に返す営みを繰り返しながら、古来から命をつないできたのです。しかし、循環とは無縁である放射能物質をこれ以上作り出せば、いずれ地球に住むあらゆる命が被ばくしかねないことを、今、内部被ばくのコリスクを抱えながら精一杯生きのびようとしている子どもたちが体中で私たちに訴えています。今後放射能汚染との長い闘いが予測されます。私たちに求められていることは、目の前の命を守り、地球という共有財産を保全しながら未来世代へ命をつなぎ、感謝と責任のコサイクルを取り戻していくことに

あるはずです。

さいごに

誰かの被ばくの上に電力を享受することは倫理に反します。これ以上地球を傷つけ、未来世代に核廃棄物を押し付けることも倫理に反します。よって、青森県六ヶ所村の核燃料再処理工場の運転停止を強く求めます。

以上